

離 広 の 前 に

二一 養 正 養 主 学 部 学 科 台 成

文学部学生 武 内 秀 樹

4年間の学業の総決算たる卒業論文を提出したばかりのところへ、今度はこの原稿の話が来た。この紙数では学生生活の総決算とは行かないが、気の向くままにペンを走らせる。

1. 街の中で

広島に出て来てまだ間もないころだったか、ちょっとした計算をしたことがある。——郷里は人口約12万人の都市、広島市の人口は100万人余。仮にそれぞれ10万、100万とすると、自分は、郷里では10万分の1の存在だが、広島では100万分の1でしかない。また、10万人の1%は千人、家族・親戚・友人・知人、何や彼や合わせればそのくらいの数になるかもしれない。が、広島では千人はわずか0.1%でしかない。——そんなことを考えると、自分の存在、一人の人間の存在がずいぶん小さなものに思えてきた。個々は小さい人間、大きい事をするには大勢集まらなければならない。だから「人間は社会的動物」なんだな、と改めて。

2. 旅路に

この4年間は以前に比べて旅行の機会に恵まれた。旅先で様々な事物を目にし、あるいは耳にすると、いろんなことを思う。例えば、越中五箇山や能登輪島の光景が強く印象に残っている。五箇山に行ったのは夏だから雪はなかった。道路もきれいに舗装されて今では観光地として開けているが、庄川沿いの急こう配・急カーブを登るのは自動車でも楽ではない。まして徒歩の昔は！それに冬は豪雪地帯であることに変わりはない。山陽地方の平野部にしか暮したことのない自分にとっては、そんな過酷な土地にも人が生きていることが妙に驚異であった。輪島の朝市を訪れた

五月の日は雨が降っていた。多くの婦人達が朝市通りにテントを連らね民芸品や海産物等を並べていた。その中に何人か違う人がいた。合羽を身にまとい、古びた腰掛けに座り、傘を腕に支え、両手にいっぱい持った民芸品を振りながら、道行く人々に声をかけていた老婦人達。あの人達は、生活をかけて必死なのである。——旅路で得たものの一つは、人間は簡単には死なないというか人間のたくましさとか、何かそういう感動であった。

3. もう一つの結論

先行研究というものがある。論文にはなにがしか解明された事が述べられている。だが解明されていない事は書かれることはない。しかも、未解明なことの方がずっと多い。そんな当たり前といえば当たり前の事を、ややもすれば見落としがちであった気がする。卒論では空白に近い主題に取り組んだ訳だが、その取り組みの中で、先行研究がある部分にも実はボコボコ穴が空いていることにやっと気づいた。一つの空白を埋めるには、関連した、もっと多くの空白をも埋めなければならない。すると問題がどんどん大きくなって、手に負えないようなことが出て来る。——確かなことは少なく、一つのことを徹底的に追究し通すということは、自分の思いもよらないほど大変なことであるというのが、卒論には書いていない、もう一つの結論である。

自分にはいくつかの心の故郷がある。忘れ得ぬ事、忘れたい事、その両方が交ざっている事……4年間のいろいろが詰まっているここ広島も、4月からは心の故郷の一つとして懐しむことだろう。卒業後数年で広島大学が見知らぬ町に移ってしまうのは、いささか寂しい。